

『読書のすすめ』

「読書タイム」など、学校の一日の生活の中に10分程度の時間帯を設け、とにかくその時間になったら、先生も子どもたちも静かに本を読むという取組を多くの学校が取り入れたのは十数年前のことです。当初はそんな短い時間に本を読ませることにどんな意義を見いだせるのか、とか、読書することを強制しても子どもには何も身に付かないなどとその取組を否定する考え方が多かったものです。そんな時間があるなら、漢字や計算練習のために時間を費やした方がまだましだという声もありました。

しかし、読書の時間帯を設ける取組によってよいことがあったとする学校が多数ありました。例えばある高校では、朝読書をすることによって、それまで朝からドタバタざわめいていた生徒たちに落ち着きが見られるようになったというのです。このことは、高校のみならず、中学校や小学校からも同様のことがいわれていました。読書したから落ち着いたというより、朝の一定の時間、教室内がシーンと静かになるということが功を奏したのではないかと思います。

この読書の取組の大きな目的は、読書の習慣を身に付けさせたいということにあるのですが、取組を始めてすぐに子どもたちが読書好きになるということはありません。大事なのは継続を図ることです。学校の日課の中に読書の時間を組み込むことは、けっして多くの時間をとることはできませんが、たかが10分されど10分なのです。この10分程度の時間をどう活用し、どう定着させるかが重要となります。

読書の時間を設定するにあたって多くの学校が留意した点は、読書することをけっして強制しなかったことです。読書する時刻になったとたんに子どもたちは誰に指示されることなく、自分で選んだ本をただ黙々と読むのです。強制されなくてもどの子も黙って本に目を向けるようになります。もちろん、子どもと一緒にいる先生も子どもたちと同様に黙って読書するのです。ある学校においては、職員室にいる先生方や校長先生、保健室にいる養護教諭の先生も一斉に子どもたちと同様に本を読むことに取り組んだという例もあったようです。つまり、読書の時間は校内の全ての子どもと職員が、一斉に読書をする時間であること、学校ではその時間があり、その時間は全員が静かに読書するのが当たり前のことであるという意識を持たせることに努めたのです。

子どもたちが本を選ぶことに対し、先生方は多くの口をはさむことをせずに、子どもが読みたい本を自分で選択することを尊重しました。家で読んでいる本を持ってくる子もいれば、図書室や学級文庫の本を選ぶ子もいます。小学校低学年であれば、絵本を選ぶ子もいます。上の学年の子でも読み進めるのに個人差がありますから、その子のペースで読む

ことができる本を選びます。学年に相応しい本を選びなさいという指導はしないようにします。とにかく読んでみて面白いという思いを持たせることが大切です。もちろん、読後の感想文を書きなさいということもしません。

子どもを読書好きにさせたいと、大人が気をもんで、あれこれと子どもにかかわろうとしても、けっして大人の思惑通りにはいかないものです。特に読書については、周りから読みなさいといわれても一時的に読んだにせよ、長続きはしないものです。内面から読みたい、読んでみようという主体的な動機が必要なのです。人からいわれて好きになるということはないのです。学校での読書の時間を設定する取組は、限られたわずかな時間であっても、子どもたちの自発的な読書へのきっかけづくりであります。特効薬的な効果を求めるのでなく漢方薬的な極めて長きにわたる一つの環境づくりであるともいえます。

子どもが読書をするようになる、読書が好きになるための環境というと、身近なところ、子どもの目に触れるところに本があるということが必要です。家庭環境においては、保護者が読書好きの場合、子どもも読書好きになる傾向が強いと思います。よく読書好きが遺伝するからだといわれることがありますが、遺伝というより、その子どもが育ってきた環境の方が大きなウェイトを占めるのではないかと思います。そのような家庭には多くの本があるでしょうし、子どもは幼い時から自分の保護者が読書する姿を見ながら育っているのですから。

学校においては、読書の時間を設定する取組の他に、子どもたちが学校にある図書に目を向けるための取組も大切になります。新しく入った図書を紹介するコーナーとか、子どもたちが読んだ本で面白かったところを紹介するコーナーの設置など、常に子どもたちが目にするのできる環境づくりが大事です。また、先生が「この本のここがおもしろかったよ」という紹介をしてやったり、関係団体の方が定期的に本の読み聞かせをしてくださることなどによって、子どもたちが興味・関心を持つきっかけとなります。

なぜ、子どもたちに読書をさせたいのか。読書をすることによって「知識が増える」「読解力が身に付く」「学力が向上する」「考える力が身に付く」など、学力向上に直結する効果が期待できるとする向きもありますが、私はそのような目的を大上段に振りかざすことはしたくありません。むしろ読書嫌いにさせてしまうかもしれません。

子どもたちが自発的に読書に向かうためには、読書が楽しい、面白いといった内面から湧き上がる気持ちが不可欠です。そのためには、よい環境づくりをしてやるのが大切となります。その働きかけをしたからといって、必ずしもすぐにその成果が見えない場合も多々ありますが、地味であっても継続した取組が欠かせません。

画面の映像から矢継ぎ早に様々な情報や刺激を受けている現代の子どもたちの状況を考えると、なおのこと、文章を読むことによって入ってくる情報を自分の頭の中で思いめぐらせ、自分なりのイメージや想像をふくらませるといった楽しさや面白さを味わってもらいたいものです。